1章サンプル

確かに小学校時代も、中学校時代もまだ、僕も千種も成績は常に上位だったものだ。今がそこまで悪いわけではないが、それにしたって当時と比較すれば確かに、よかった頃とも言いたくもなる。
思い返すに、まああの時の状況では、千種が本の中身なんて覚えていないだろうなとは思う。もともとほとんど読む気なんてなかっただろうし、時期も――
「はーろー」
「っ……！」
唐突に。
まったく唐突に、後方から声が聞こえたかと思うと。事件が起きていた。
千種の後ろから伸びた手が、両手が、千種の……その、胸を、しっかりと掌の中に収めていた。というか、要するに、揉んでいた。
声なき悲鳴をあげる千種が、顔を少し赤くして身を縮めている。その無抵抗に気をよくしたのか、狼藉者はさらに二度三度と揉み続けた。千種はといえば、それでもほんの少し手を振り払う仕草を見せただけで、ますます縮こまるばかりである。
なんという貴重なシーン。……とか、言っている場合ではない。
「おい」
「はーい、ここまでー。せな、ちょっと大きくなったかな？」
僕が声をかけるのと、千種に背後から襲いかかった彼女が手を放すのが、ほぼ同時だった。

どう考えても僕の声は意味をなしていない。遅かったようだ。
「……やめてよ、そういうのは」
千種が少し口を尖らせて言う。背後から隣に移動した彼女を睨みつけるが、迫力はまったくない。彼女はまるで気にした様子もなく、千種と僕に向かってひらひらと手を振った。
「今日は二人一緒なんだねー、せな、ももちー。私の仕事、ももちーも手伝ってくれたのかな？相変わらず仲良さそうでうらやましいなー」
彼女は、千種とよく一緒にいる友達だった。そして、今の言葉が示すとおり、今日の仕事を千種に振った、生徒会の彼女である。
「でも、ももちー、ちょっと遅いよー。彼女があんなことされてるのをじっくり凝視してるなんて、あ、もしかして、そういう趣味なのかな」
「……百瀬の趣味は仕方ないとして、今のはメグが悪い」
「いや待って待ってくれ急なことで僕も驚いていただけでそんな眺めていたわけじゃ、っていうか彼女とかそういうんじゃないしあと千種もフォローしてくれよ!?」
だからツッコミどころは一つに絞ってくれとあれほど。
あはは、と彼女はのんびりと笑った。
「相変わらず素直じゃないんだね、ももちー」
「百瀬がツンなのは仕方ないとして、やっぱりメグが悪い」
「はい、せな。会長が旅行土産で買ってきてくれたチーズブッセだよ」

「許す」
とりあえず、僕は。ひとつひとつツッコミを入れることは、諦めた。
というより、追いつかない。この二人の会話には。お土産を受け取りながら、千種は尋ねる。
「旅行って、どこ？　小田原？」
「違うよー。なんで小田原？」
「じゃあ、箱根」
「あんまり移動してないし。日光だって言ってたよ。栃木の」
「惜しかった……」
「かなり遠いよ。かなり。小田原と箱根は実際のせなとももちーくらい近いけど、小田原と日光はももちーが自称する二人の距離ってくらい違うよ」
おい。なぜいきなりそんな方向に持っていった。
「確かに、それくらいは違いそうだけど」
そしてなぜ納得した。
「ところでメグ、今日お兄さんに会ったよ。数学部で」
「おー？　なんでまた？」
「流れで百瀬が数学部の見学に行くことになってね。保護者として付き添い」
「誰が保護者だおい」
「私」

1．けいさん！

答えられた！　普通に！
子供から現金をせびる保護者とかいてたまるか。いるかもしれないけど。世の中こわい。
「ももちー、数学部入るの？　ダメだよ数学部は、未来ないよ。暇してるなら生徒会に入ればいいと思うよ」
「いや、入るつもりはないし、暇なわけでもないんだけど、ていうか生徒会はそんな暇人が集まる組織でいいのか？」
「いいんだよー」
なにそれこわい。
そして相変わらず、ツッコミのつもりの言葉を肯定で返されるとその後が続かない僕である。
「帰ったらお兄さんから話があると思うわ。でも、せっかくだし今直接お願いしてもいいんじゃないかしら、百瀬」
千種が彼女のほうを見ながら言う。
うん？　と彼女は千種の顔を覗いてから、僕のほうに向き直った。
「なにかあるの？」
「あ……うん。いや。お兄さんに聞けばいいんじゃないかな」
「んー？」
なんでまたさっきの今で、またあんなプレイをしないといけないのかと。脳内キャラ設定を口頭で人前に晒すという苦しみを味わわないといけないのかと。少なくとも千種はわかってて

振っただろう、これ。睨みつけてみるが、平然と見つめ返されて終了。
「あ、もしかして、せなのカップサイズを教えてほしいとか、そういう？」
「違うよ！　全然違うよ！　仮にそうだとして本人の目の前で聞く人はいないよ！」
「百瀬、そんなこと聞き出そうとしていたなんて……ううん。毎日そんなことばかり気にしてた百瀬の視線に気づかなかった私が迂闊だったのよ……」
「だから違うって！　千種はなんの話なのか知ってるだろっ！」
「ももちーは軽い冗談でも全力で慌ててくれるから、楽しいよねー」
「うん」
「……」
帰ったら泣いてやる。

結局その場は、帰ってからのお楽しみ、ということにしておいて、別れた。
数学部の問題だ。僕が頼む必要はない。うん。
東山線に乗って、名城線に乗り換えて、途中で一足先に千種が降りる。今年ものこのパターンは変わらない。
「じゃ、また明日ね」
「うん」
駅に止まる前。簡単に別れの挨拶を済ませる。いつもならこれだけだが、今日はここに千種

2章サンプル

「あ、焦ってるね。可愛いよ百瀬君！」
「……いや、別に焦ってなんか」
「むしろあたしは思うんだ。百瀬君がメイドになれば千種さん以上に人気出るんじゃないかな！」
「なんでっ!?」
どういう展開なんだそれは。
いやいや、と十和田さんは神妙な表情で首を横に振った。
「数学部にも百瀬君派は多いからね。あの先輩は逸材だ、本気でやれば化ける、いや変に女装しないでも今のままで十分可愛い、と一年生男子からも支持が」
「たまに遊びに行ったときの妙な反応はそういうことかっ!?」
予想以上に数学部には歓迎されている感があったので、せっかくだからとちょくちょくは遊びに行っているのだが、なぜか入部の時には特に絡まなかったはずの一年生から妙に懐かれているなあとは感じていた。
今度は十和田さんは力強く頷いた。
「さすが、百瀬君が作ったキャラに釣られてやってきた子たちだね。想像力豊かな一年生が揃ったよ」
「想像力とかそういうので片付けていいのかそれは」
「ちなみに、百瀬君を女装させたかったらまず千種さんを懐柔して、千種さんから頼むように

すれば確実に落ちるっていうのが数学部の公式見解だよ」
「数学部は普段からなにしてるんだ本当にっ！」
「あたしも百瀬君一人ほしいなー」
「!?」
今なにか変なことを言われたような気がする。
いやきっと気のせいだ。そんなはずはない。
僕の知らない間に実は僕は三人目だとかそんなことをいきなり言われても、困る。
「あたしが百瀬君を買ったらねー、数学のプロに育て上げてあげるよ！」
ほう。買ったら、というところがアレなのは別として、十和田さんに数学を教えてもらえるのだとしたら、それはとても魅力的だ。十和田さんはこのまま将来も数学で博士号取って教授になったりするんだろうなーというイメージが容易に湧くほど、今のままでも十分に数学のプロに見える。
夢見る少女の笑みを浮かべて、十和田さんは材料の計算を続けながら言う。
「百瀬君をね、机とベッドと、数学の参考書でいっぱいうまった本棚しかない部屋に閉じ込めるんだ。そして毎日課題を与えて、ちゃんと合格できた日だけご飯をあげるの。一ヶ月頑張れたら外出も認めてあげるよ。でもその頃には百瀬君はもう逃げようなんて思わなくなってるんだ。数学だけがただ一つの娯楽って感じられるように完全に躾けられてるから……ふふ、可愛いね百瀬君」

「……」
変な汗が出た。
なにこの子こわい。スパルタなんて次元ではなかった。
なによりこの発言を笑顔で言っちゃう十和田さんこわい。
「――って本を文化祭で出そうか、という話も数学部で出てるよ」
「だから数学部はなにをするところなんだっ！」
「ところで関係ないんだけど百瀬君、今日この仕事終わったら数学部に遊びにこない？」
「関係ないんだな？　本当に関係ないんだな!?」
先生。やっぱり部活って、こわいところみたいです。

昼は千種の演劇練習につきあって、夕方は文化祭の準備。文化祭本番が近づいて、実作業が始まると、当然僕達二人だけではなく、基本はクラス全員、といっても実際は色々都合があるので半分くらい、というメンバーで仕事を行っていた。作業といっても、授業があるうちから教室をリフォームしてしまうわけにもいかないので、買い物とか当日の役割分担を決めるとか、邪魔にならない程度のものは組み立てておくとか、その程度のことしかできない。
ともあれこんな調子なので、さすがにしばらく続いていた、千種とのバスケ練習は

3章サンプル

涼しくて運動しやすい季節。は、あっという間に通りすぎて、寒い季節に変わる。着替えるのをためらう寒さになっても、当然、体育の授業はあるのだ。幸いなことに今日は体育館の中、しかも比較的楽しいバスケットボールである。同じ屋内でも柔道などよりはるかに気は楽だ。

運動は間違っても得意な方ではなかったが、千種の付き合いでバスケは昔からよくやっていたこともあって、そこそこできる。まあ、テクニックがあっても、基礎体力で劣っているので活躍できるわけでもないのだが。

準備運動をしつつ、遠くでやっている女子のほうの様子を伺う。体育の授業は男女別で、その代わり二クラスの合同で行われる。実は僕のクラスと千種のクラスがその組み合わせになっていた。大抵の場合、男女は場所も全く別なのであまり意味はないのだが。今回はお互いにバスケのため、半分ずつ体育館を使用している状況である。

もちろん、女子のほうもまだ準備運動の途中だ。千種が活躍している姿が見えるわけでもない。が、千種の姿は目立つ。なんと言っても頭ひとつ抜けているのだから、体操中でもはっきりとわかる。

――はずなのだ、が。

何度か視線を往復させてみたが、千種の姿は見当たらなかった。

まだ午前中なので今日はまだ千種には会っていない。もしかしたら、風邪かなにかで休んでいるのかもしれない。非常に珍しい、というより、聞いたことがない話だったが。

まあ、そういうのでなくとも、女子の場合は色々とあるわけで、そっちのほうなのかもしれ

ない。となると、きっとどこかに座っていたりして――
「百瀬ー。女子のほう見過ぎだぞー」
「うわっ!?　す、すみませんっ」
急に、先生に大声で、名指しで指摘された。
一同大爆笑である。……うう。なんだ、この辱めは。笑い声に気づいた女子のほうが、こっちに視線を送ってきているのを感じる。
先生は、うん、うんと大げさに頷いて、なお、続けてきた。
「いや、なに。健全で良いことだな。が、準備体操を疎かにすると怪我の元だからな。あとかっこいいところを見せようとして無理して自爆する奴も多い。くれぐれも気をつけるように」
「え、あ、いえ……はい……すみません」
周囲では笑いが止まらない。うう。絶対今こいつら準備体操に意識向いてないだろ、と言いたくなるが、無論そんな指摘をする勇気はなかった。
「先生ー！　百瀬君なら特定の一人を探しているだけなので、あまり心配はいりません！　あと今更かっこつける必要もないので安心ですちくしょー」
……
五十嵐め。授業中でなければ細かく反撃していたものを……！
「百瀬ー、勝ち組なんだから授業中くらい我慢しろー」
「熱すぎるぞー」

「爆発しろ」
……
こいつら……こいつら……
クラスメイト総攻め、僕総受けである。文化祭の事件以降、すっかりこのノリが定着してしまっている。だから、そんな関係ではないと。はっきり言っているのに。
……しかし、とはいえ、じゃあ何を見ようとしていたかといえばやっぱり千種なわけで、実に立場は弱いのだが。
ちなみに当然男子のほうも僕のクラスと千種のクラスのメンバーが混ざっているわけだが、千種のクラスの生徒のほうにも普通に言われている状態である。なぜ伝染した。……このノリのせいだ。
おかげで、あまり千種の姿を確認するのができなくなってしまった。
と言っても気になるので、準備運動が終わって、練習が始まって、時々空いた時間を利用して密かに女子のほうを確認してみたりしたのだが、やはり見つけることは出来なかった。千種が体育の授業に参加していないことは確実だった。
大好きなバスケなのにできなくて、さぞ悔しがっていることだろう。
「言っておくけどな」
「わっ」
シュート練習の順番待ちの間に後ろについた五十嵐から、急に声をかけられた。

3．とある女生徒への追想

「まだ見てるのバレバレだからな、ルミ」
「あ、いや……」
「いないな。確かに。気になるな。でもなルミ、お前はまだ知らないかもしれないけど、女の子にはそういう日もあってだな」
「知ってるよっ！」
「お前さあ、バスケのことになると、いつも以上に千種さんのこと気にかけるよな。何かあるのかもしれないけど、とりあえず今は授業中だからな」
「……うん。ごめん」
やれやれ、といった感じのため息をつくのが聞こえた。
その通りだ。千種だって調子悪い日くらいあるだろう。気にしすぎというのは間違いない、のだが、どうしてもバスケとなると意識してしまうのもまた事実だった。五十嵐のやつは、いつもながら、よく見ていると思う。千種がバスケ部をやめたと聞いた時から、なおさら気にしてしまうようになっていた。
とはいえ、五十嵐の言うとおり、授業中だ。集中していないと怪我の元だって言われたばかりだしな。真面目にやろう。
出番が回ってきた。構える。ここですっきり決めてやろう。集中する。
曲げた両腕をすっと伸ばし――
「素直なルミが可愛くて好きだぞ。俺は」

――ずるっと滑って、ぼてぼてとボールは虚しくコートを転がった。
ぎ、ぎ。無言で振り返って睨みつける。
五十嵐は意に介した風もなく、よ、と軽くシュートした。綺麗にゴール。
「よっしゃ、今のは完璧だな」
ぐ、と僕に向かって親指を立ててみせた。
……うん。こういうやつだ。

秋が冬に変わりつつある季節。昼間であれば、まだ屋上に出ること自体はそこまで厳しくはない。とはいえ、もう半月といったところだろう。ここから急激に寒くなっていくものだ。
屋上に上がっても、千種はいなかった。大抵の場合、千種のほうが先に来ているものだ。弁当持参の千種に対して、パンを買いに行っている僕のほうが遅いというのは必然だった。もしかして、本当に休みなのかもしれない。千種のほうが後ということもないわけではないので、断定してしまうには早いのだが。
いつもの、腰掛けるのにちょうどいい段差のところに座る。
まあ、三分だ。三分待って来なければ、帰っていいだろう。
……

風邪だろうか。事故とか怪我とかでなければいいのだが。改めて思い返してみても、千種が学校を休んだというのは本当に覚えがない。色んな事があったときでも、毎日しっかり来ていた。僕のほうはそこまで体が丈夫でもなく、時折は風邪で寝込むこともあったりしたのに。いや、基本的に体力が違いすぎるというのは紛れも無い事実なので、この結果の差も当然といえば当然なのだろうけれど。

少し心配しているところだったが、一分ほど待ったところで、屋上のドアが開いた。振り向くと、千種が立っていた。ほっとして息を吐く。ちょっと来るのがいつもより遅かったという程度だ。

「お待たせ？」

「いや。いつも待たせてるし」

「そうね」

千種の受け答えは短いが、とりあえずどこか調子が悪いということもなさそうだ。

それ以上特にいつもと違う会話もなく、千種は弁当箱を取り出して、僕は袋からパンを取り出して、一緒に昼食を摂る。

ここまでは、いつも通りの平和な昼だった。

4章サンプル

4．僕の千種がこんなに可愛いわけがない

『百瀬の家に行っていい？』

そのメールが届いたのは、本当に、実に唐突だった。何事もない平凡な夜だったはずの夜は、この瞬間から大荒れになったのだ。

「……は？」

携帯の画面を見ながら、何の間違いかと何度も我が目を確かめるように、画面を閉じてまた開いたり、メールを開き直してみたり、三分間待ってからもう一度確認してみたりと、色々試して、そして僕はようやく現実を受け入れた。

もちろん、メールの送り主は、千種だ。

千種が、僕の家に来ていいかと聞いているのだ。

……え？

携帯を握る手にも汗が滲む。もう完全に脳がパニックを起こしていた。なぜ。なぜ。なぜ？何をしに？

悩んで悩んで、散々悩んで、ようやく返信する。

『なんで？』

送ってから。素っ気無さ過ぎただろうか、とか。すごく嫌がっているように見えるだろうか、とか。もっと言うことはなかったのか、とか。色々と後悔してしまう。とはいうものの、他に気の利いた言葉が思い浮かぶでもない。今の僕に出来るのは、ただ、もうさっきからバクバクとはっきり音を立てる心臓の音を気にしながら、次のメールを待つことだけだった。

『テスト勉強。って名目で。色々あって、行きたいだけ。部屋に入ってもいい？』
返信は、すぐにきた。相変わらず淡々としている。絵文字も顔文字も一切使わないからどうしてもそう見えるだけなのだが、実際のところ淡々と書いているのだろう。きっと。
なんて冷静に分析している余裕があるとでも思ったか！　なんだこれは！
大慌てである。ちょっともう何を言われたのかわからない。部屋に入るときた。千種が。僕の。部屋に。つまりここに。千種が。
変な汗が出てきた。気持ち悪いので手の甲で汗を拭う。やけどするかと思うほど熱い顔。ふらふらしてきた。
とりあえず座っていることに耐えられなくなって、顔からベッドに倒れこむ。少し冷たい布団が、心地いい。すぐに温かくなってしまったが。
手元でまた、ピピピと音が鳴る。
『あ、すぐにとか、明日にとかじゃないよ。見られたくないもの隠す時間欲しいでしょ。来週の土曜日とか』
……
はい。
次のメールは、僕が返信に迷っているというか頭が真っ白になっている間に届いた。
僕はただメールを眺める。
どんな返事を返そうとか、まずそこまで頭が働かない。いきなりのことすぎて、完全にオー

バーヒートしていた。顔を半分布団に埋もれさせて、メールの文字を一文字ずつ追って、想像を巡らせる。

千種がいきなり来る理由。部屋まで来る理由。見当もつかない。今までそんなことはなかったのだから。もちろん何か目的があるのだろうが、心当たりもない。「行きたいだけ」というのがまた、意味深だ。

千種は何を考えているかわかりにくい。それは知っていたことだったが、今回は飛び抜けていた。いきなりそんなことを言い出すなんて。わかっているのだろうか。僕は男だ。千種は女だ。そんな、気軽に言っていい言葉じゃないだろう。僕は男で――

「あああああ」

布団の上を転げまわる。

一瞬。ほんの一瞬、変なことを考えてしまった自分が、とても嫌になった。

千種なのに。小さい頃からずっと見てきた千種なのに。なんてことを。布団を殴る。ぼす、と柔らかい反発。もっと重く返ってきてもよかったのに。ダメな自分を叱って欲しい。

……でも。でも、千種はどうなんだろうか。千種は僕の部屋に来るということについて、本当に何も考えていないだけなんだろうか。今の千種は本当に僕と違って平然としているのだろうか。もしかして千種も――

「あー。あー！　あああああっ！」

叫んで、思考をかき消す。

考えれば考えるほど、妙な妄想が広がっていく。もうこれ以上ないというくらい熱くなっている顔と頭と体に、心まで沸騰してしまっている。何度も何度も布団を叩いて、とにかく一度脳内を空っぽにしようと努める。

余計なことを考えるな。

今僕がすべきことは、いつも通り、冷静な対応をするだけだ。冷静な対応――冷静な……あまり、できた覚えがないけど……いや、とにかく、ピンチの時こそ頭を冷やすのだ。ここで奮起しろ百瀬成美。

返信メッセージを、ゆっくりと、打ち間違えのないように気をつけて、打つ。

『準備しておく』

打ち間違えのないほど、短いメッセージだった。

それに対する返信は、驚くほどすぐにやってきた。

『よかった。ありがとう』

このメッセージを打ったときの千種はどんな顔をしていたのだろうと想像して。

僕はまた、顔を埋めた布団からしばらく抜け出せなくなるほど悶えることになるのだった。

すっかり冬である。

４．僕の千種がこんなに可愛いわけがない

名古屋というのは、夏は暑く冬は寒い。なぜか内陸性気候みたいな特徴を持つところである。そんなわけで、真夏とか真冬とかは、とても屋上になど出ていられない。夏は中庭という手段があり、実際木陰があるためそれなりに過ごすことはできる。が、冬は実にどうしようもないものだ。

以上のような事情もあり、冬はあまり昼に千種に会うことはなかった。メールの件で話を聞きたいのだが、早くとも夕方まではお預けとなる。……もっとも、内容が内容だけに、何をどう聞いていいのかわからず、そしてまともに話が出来る自信もあまりなかっただけに、それで都合がいいとも思った。昼に変に話をすると、午後の授業に影響しそうだった。とても。

実際のところ、メールのことを思い出して、話すべきことを考えてばかりで、授業は結局全然頭に入ってこなかったわけで。どちらにしても、あまり変わらなかった。

今日の授業とホームルームが全て終わると、すぐに玄関に向かう。千種はもう、ぼんやりと宙を眺めながら立っていた。

「お待たせ」

「……ん」

声をかけると、いつもと変わらない落ち着いた声と無表情で、千種が僕に視線を向けた。

スリッパから靴に履き替えて、歩き始めた千種の隣に並ぶ。

玄関を出た途端に風に吹かれて、屋内との気温差に震える。
「さむっ……」
「寒いね」
ほとんど反射的に出た言葉に、千種が冷静に追従してきた。本当に寒いと思っているのかどうかわからないのは、いつもの如くである。しかし、こんな季節でも女子はスカートだ。恐ろしく冷えるだろうにといつも思う。この高校は服装には緩く、別に律儀に制服を守る必要もなかったりするのだが、千種が制服をやめた日は見たことがなかった。人のことは言えないのだが。
学校を出て、駅まで歩く。駅までは、だいたい五分ほど。周囲には同じく特に部活動をしていない学生たちが帰路に付いている。
いつもの光景なのだが、なんとなく今日は眺めてしまう。隣を歩く千種のことを妙に意識してしまって、それを中和しようという試みだった。こんなことをしている間に、駅は近づいてきてしまうのに。貴重な時間が過ぎてしまうのに。
「ありがとうね。お邪魔する件。大丈夫そうで、嬉しかったわ」
うだうだと悩んでいるうちに、千種のほうから切り出してくれた。
……僕が迷っているから、その話題を出してくれたのだろうか。なんとも、情けない自分。
「いや、いいんだけどさ。なんで急に、メールで」
「メールのほうが、ゆっくり考える時間できるでしょ。もっと遅いかなと思ってたけど……